

『就実大学大学院教育学研究科紀要 2018（第3号）』 抜刷

就実大学大学院教育学研究科 2018年3月10日 発行

ダンス・ムーブメント・セラピーの実践における 言語交流と文化背景についての一考察

Verbal Interactions and Cultural Issues in Dance Movement Therapy Practice.

山 田 美 穂

ダンス・ムーブメント・セラピーの実践における 言語交流と文化背景についての一考察

山田美穂

Verbal Interactions and Cultural Issues in Dance Movement Therapy Practice.

Miho YAMADA

抄録

アメリカを中心に発展したダンス・ムーブメント・セラピーを日本で実践する上では、言語と非言語を行き来しながら進む心理療法であるという認識と、欧米との文化的相違を考慮した実践の工夫とが必要である。本稿では、これらの点について、「言語／非言語」および「欧米文化／日本文化」という二つの視点から、トレーニング場面およびセラピー場面の記述をもとに検討した。さらに、哲学者・森有正の思索をヒントに、日本的な二者関係の世界を強みとして生かしながら、その上で一人称の世界を確立していくという課題について考察した。

キーワード：ダンス・ムーブメント・セラピー，非言語的体験，身体，経験，日本文化

I. はじめに

ダンス・ムーブメント・セラピーDance Movement Therapy (DMT) は、心身のつながりを前提として、からだで感じ、からだで表現すること、すなわち身体的体験を重視する心理療法である。筆者はアメリカでDMTのトレーニングを受ける機会に恵まれた(山田, 2017) ことから、その経験をいかに日本で活かすかということをテーマに実践に取り組んでいる。

DMTはその母国アメリカにおいてもマイナーなセラピーであり、さらに日本での浸透度は非常に低い。そのような中での課題として痛感されるのが、DMTそのものの特性を未経験の人に伝えることの難しさと、文化背景を考慮した実践の必要性である。

まず、日本の心理臨床の体系の中で、他のアプローチとの相違点を明確にししながら、DMTを位置づける作業が必要である。そのために、言語と非言語という観点から、DMTの実践とトレーニングを検討することが有効であると思われる。なぜなら、心理臨床は伝統的に言語面接が主流であり、非言語的アプローチが中心とみなされやすいDMTは敬遠されてきた節があるからである。しかし実際には、DMTにおいても言語は重要な要素である。

また、モダンダンスをベースとして創始され、発展してきたDMTは、もともと欧米の文化に深く根付いているが、一方では世界各国で伝統文化を活用した独自のDMT実践が試みられ、多文化的文脈が重視されている。日本の舞踊文化とDMTに関する研究も散見されるが、その数は少なく、かつ伝統舞踊や舞踏などの活用を論じたもの（Capello, 2007, 2012, 2015；八木, 2008；松原, 2012）が中心で、変動し続ける現代日本の文化とDMT実践の関係に関する議論は十分とは言えない。

そこで本稿では、「言語／非言語」および「欧米文化／日本文化」という二つの視点から、DMTの諸側面を検討する。まずアメリカでのトレーニングの実体験をもとに、DMTにおける言語と非言語の関係を整理する。続いて、哲学者・森有正の思索をヒントに、日本人にとっての踊ることについて考察し、現代の日本におけるDMT実践の可能性について検討する。

なお、既に何度か出てきているが、このテーマを考察する上では、「経験」と「体験」という二つの言葉が重要なキーワードになる。どちらも英語ではexperienceという単語になるが、日本語では全く同じ意味ではない。ひとまず本稿では、「体験」を「より身体に根付いた、その人独自の、一回性の、必ずしも十分に言語化されない内的プロセス」という意味で、「経験」を「より概念に近い、言語化された形で共有されやすい、継続的な内的プロセス」という意味で用いる。

II. DMTのトレーニングにおける非言語的体験と言語的表現

1. experiential learning

ダンスセラピストとしてのトレーニングでは、experiential learningが重視される。直訳すれば「体験学習」であるが、実務でよく使われる用語としては「ワーク」に近い。セラピーを受け手として自分のからだで「体験」し、その体験をしっかりと味わうことから、トレーニングは始まる。たとえば、DMTの母国と言えるアメリカの中心的組織American Dance Therapy Associationの年次大会では、講演やポスターセッションを除いた発表セッション（セミナー）の要旨に発表時間におけるムーブメントの割合が表示されており、ほぼすべてのセッションで実際に身体を動かす。そこには、学術的・論理的・知的探求と、身体的・直感的・プレイフルな探求を統合していこうとする、DMTの基本姿勢が示されている。

2. 実体験の記述

筆者は昨年8月から今年5月まで、9か月間の在外研究を許可され、米国テキサス州オースティン市に滞在した。研究テーマの一つはDMTのトレーニングであり、その中でのexperiential learningの積み重ねは、英会話が堪能ではない筆者にとって、際立って瑞々しく確かな手ごたえを感じられる体験であった。以下に示すのは、3日間のDMTワークショップに参加した際の2日目の一場面である。言語的コミュニケーションだけではとて

も不可能な、深い共有が生じることを示すエピソードであると考え、この場面を一人称の〈私〉の視点で記述する。なお、登場する参加者名はすべて仮名である。

ワークショップの初日の夜、北海道の実家の祖父母がほぼ同時に入院し、二人とも余命僅かだという連絡を受ける。非常に動揺しながらスタジオに向かい、2日目に参加する。朝、講師のサマンサ先生に挨拶すると、「昨夜はよく眠れた？」と聞かれ、「あまり。実は…」と祖父母の状態が悪いことを伝えると、サマンサ先生は自分の胸に手を当てる。受講生の一人で友人のパーティがそばに来て寄り添ってくれる。

折しもその日のテーマは「喪失と悲しみ」だった。「自分自身の悲しみを感じながら自由に動く」というワークで、ペアを作り、交代で動き手と見守り手をするという内容だった。私はメアリーとペアになり、先に動く役をした。床に座った姿勢から感じていくと、胸に平たく、重い液体のような部分がある。“涙のプールみたいだ。これが私の悲しみだ”と思う。“何かに包まれたい、誰からも見えなくなりたい”という気持ちになり、そばにあったブランケットを頭からかぶる。ブランケットの内側で、サマンサ先生が「安全な場所を見つけて」と教示をしているのが聞こえる。私を見てそう言ったのかどうかはわからないが、ブランケットをかぶったことを肯定されたように感じる。外から見えなくなると安心して、涙が出てくる。「感じたものを動きにしていって」という教示が聞こえるが、動きたくない。なんとなくブランケットから顔を出して座ったままじっとしていると、胸にあった液体が湖のように感じられてくる。それはやがて“深い森の中の湖の暗い湖面に、一羽の白鳥と蓮の花が浮かんでいる。そこに行けば、亡くなった大事な人たちに会える”というイメージへと展開する。それは、数か月前にフォーカシングの個人セッションの中で感じたイメージと同じものであり、当時はそれが何なのかよくわからずにいたものだった。“ああ、これだったのか”と腑に落ちる。

動く時間が終了し、湖のイメージを、パートナーのメアリーに拙い英語で伝えると、メアリーが「私もそこを知っているという確信があるわ」と言い、ふと思いついたように「近くに美しい日本庭園があるのよ、今度一緒に行きましょう」と誘ってくれる。

続いて全体でのシェアリングの時間があり、湖のイメージを再び言葉にしてみると、「普遍的無意識の世界なのかもね」というコメントをもらう。パーティに「それはあなたの故郷の風景に似ていたりする？」と聞かれる。湖のイメージそのものは、実際に知っている景色ではなかったが、そう言われてみれば、故郷には白鳥が渡ってくる湖があることに気づく。

続いて、ペアに戻り、動き手だった側が、「自分にとって良い動き」をパートナーにリクエストして一緒に動いてもらう、という時間になる。そのスタジオには中庭があったので、イメージで見た湖があるつもりで、メアリーと二人で一緒に眺める。メアリーに、「腕と腕をくっつけてもいい？」と訊くと、「もちろん。背中も？」と提案してくれる。背中をくっつけて座っていると、メアリーのぬくもりが伝わった。“今わたしたち

は生きていて、いつかはみんな死ぬんだな”と、しみじみと感じ、またメアリーもそのことをよくわかっているということが伝わってくるように感じた。

3. experiential learningからみたDMTにおける言語と非言語の関係

上の記述は、DMTを含む身体的アプローチでは、トレーニングにおいても非言語的体験がいかに重要か、そしてその非言語的体験を共有する手段として言語がいかに重要かということを示している。体験の記述から、〈私〉と他の人の発言だけを抜き出すと表1のようになる。この場面はワークショップ形式のトレーニングの場面であったが、受講生－講師の関係性には、グループセラピーにおける参加者－セラピストのロールプレイという側面があることは言うまでもないだろう。発言を追うと、まず教示として「話しことば」がつかわれる。教示に沿ってワークを行い、その非言語的体験を「話しことば」にして表現し、まずパートナーに伝える。続くシェアリングの時間に他の参加者にも伝える。他の参加者からコメントをもらう。次のステップとして、パートナーに共に動いてもらうため、してほしいことをリクエストする。

シンプルな構造であるが、それぞれの発言のあいだには、今・ここでの非言語的体験があり、五感、特に視覚を通して、たくさんの情報が共有される。この場面でいえば、朝会った時から伝え合いは始まっている。サマンサ先生はその日の朝に〈私〉の動揺を見て取ったのだろう。〈よく眠れた?〉の問いかけに事情を話し、それに対して胸に手を当てる、傍に寄り添う、というムーブメントを含めて反応してもらったことで、〈私〉は受け止めてもらえたと感じることができた。そのことが、安全に守られている感覚となり、「喪失と悲しみ」のワークでの体験に影響を与えたと考えられる。

表1 ワークショップの一場面における言語的交流の構造と機能

ワークの流れ	「私」の発言	他の人の発言
開始前		先生「昨夜はよく眠れた?」【問いかけ】
	「あまり。実は…」【自己開示】	
最初の教示		先生の教示（“自分自身の悲しみを感じながら自由に動く”手順）【教示】
動き手が動く		先生「安全な場所を見つけて」【教示】
		先生「感じたものを動きにして」【教示】
ペアでのシェアリング	内的体験の語り（“暗い湖面と白鳥と蓮の花”のイメージ）【内的体験の伝達】	
		メアリー「私もそこを知っているという確信があるわ」【理解の伝達】
全体でのシェアリング	内的体験の語り（“暗い湖面と白鳥と蓮の花”のイメージ）【内的体験の伝達】	
		参加者「普遍的無意識の世界なのかもね」【理解の伝達】
		バティ「ふるさとの風景に似ていたりする?」【問いかけ】
パートナーにリクエストして一緒に動く	希望の伝達（“二人で一緒に眺める”）【協力依頼】	
	「腕と腕をくっつけてもいい?」【協力依頼】	
		メアリー「もちろん。背中は?」【提案】

このような、今・ここでの体験をその場で言葉にする作業は容易ではない。フォーカシングで「ハンドル」と呼ばれる表現を探すように、すぐにぴったりくる言葉が見つかることもあるが、なかなか見つからないこともある。そもそも、本当に深い身体的体験は、言葉の届かない領域にある。それでも、言葉になりにくい体験に近づける言葉を探し、誰かに聴いてもらい、また身体的体験に戻り、感じ直し、もっとぴったりした言葉を探し、時にはそれだ！と思える言葉が見つかる瞬間があり…という反復作業が、自己表現のプロセスである。そのような作業が、次のステップを導くということは、トレーニングにも、その先の心理的援助の実践にも、あてはまることである（図1）。

ちょうど「図と地」のように、非言語的アプローチでは、非言語的な体験が「図」として注目されるが、それを支えるのは「地」である言語である。逆に、言語的アプローチでは、言語による共有が「図」として注目されるが、それを支えるのは「地」である非言語の世界である（図2）。非言語的アプローチであっても、言語的アプローチであっても、言語と非言語、両方を行き来しながら心理療法が進んでいくと捉えることで、心理療法のプロセスを理解しやすくなるのではないだろうか。

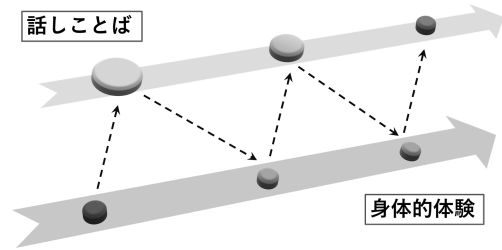


図1 身体的体験と話しことばの行き来

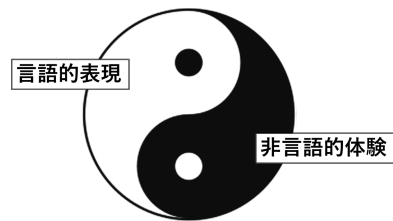


図2 「図と地」としての言語と非言語

Ⅲ. 日本文化とDMT

1. ダンスをめぐる文化の違い

先に示した実体験は、ダンスやムーブメントで、文化背景が異なる人とも深く通じ合えるというエピソードであったが、筆者以外の受講生および講師は全員アメリカ人女性であり、その言動に文化の違いが顕れている部分もある。たとえば、喪失と悲しみをテーマに、自由に動く、というワークの課題自体が、自由な感情表現に馴染んでいなければ非常に難しい内容である。もちろん、このワークショップの参加者は全員がDMTの経験者であり、それまでも学びを共にしてきたという信頼関係があることも、ワークが成立した条件であったと思われる。しかし、それらの要因を差し引いても、そしてもちろん個人差は大いにあるとしても、年齢や性別を気にせず自分のために踊ることへのハードルの高さという点で、アメリカと日本にはかなり大きな違いがある。

2. 日米におけるグループセッション場面の描写

ここでは、アメリカと日本のグループDMTセッションの場面を一つずつ描写する。二つの場面はどちらも成人グループであり、筆者はアメリカのグループにはアシスタント的役割で、日本のグループにはセラピストとして参加している。どちらも、Octaband[®] というDMT用の小道具を用いた場面であるが、プライバシーの保護と本質的特徴の抽出のため、複数の場面の記録を合成したものを示す。Octaband[®] はストレッチ素材のカラフルな布で作られており、円状の中央から16本の帯状の布（バンド）が伸びて、先端は手を通して持ちやすいように筒状になっている。乳幼児から高齢者まで幅広い年齢層のグループで自由に活用できるようにデザインされている。どのように使う場合も、Octaband[®] を中心にして参加者が輪になり、お互いのつながりを体感することが肝である（Dance for Connection, 2017）。

【アメリカでの一場面】

丸く椅子を並べた状態で、参加者がバンドを1～2本ずつ持ち、私も1本持って一緒に座る。音楽がかかり、すぐに3つの風船が投入される。他の活動の時にはほとんど動きがみられない参加者も、バンドを持つとかなり強い力で引っ張ったり、風船が自分のほうへ飛んでくると力強く叩き返したり、蹴り返したりする動きが生まれることに驚く。ただ、動きが強すぎるのか、風船が中央の小さな円からしょっちゅう落ちてしまい、見かねたスタッフが円の下に潜り込んで風船をかき出す役をする。だんだんエキサイトして椅子から立ち上がった参加者もいて、スタッフに座るよう促されている。終了後に尋ねると、風船はあくまでおまけであり、他の参加者とのつながりを感じることを意図した活動とのことだったが、風船があることで動きが活性化する一方で、注意がそちらに集まりすぎるようにも思えた。

【日本での一場面】

Octaband[®] を出すと、いかにも外国製という感じの鮮やかな色に歓声が上がります。参加者はバンドを持っても初めは楽しみ方がわからないという様子で、なんとなく引っ張ったり揺すったりしている。私が風船をひとつ膨らませて中央の円に投げ入れると、ほどなく「それー！それー！」と大きな掛け声が発生し、かけていた音楽が聞こえなくなるほどになった。バンドを引っ張る腕の動きも掛け声とシンクロし、中央の円がリズムカルに上下運動した。しかし、活性化しすぎることもなく、座ったまま、風船が飛んできた人は柔らかく打ち返したり拾ったり、幅の細いバンドの部分も使って、風船を落とさないよう跳ねさせ続ける、繊細な動作がみられた。徐々に、「いかにうまく、風船を何度も跳ねさせ続けるか」という目的が暗黙のうちに共有され、それを楽しむゲームのようになり、「いつもあのへんで落ちちゃうね」「今回はすごく続いた」との言葉も聞かれた。いつまで続くのか少し心配になるほど、誰もやめようとせず、熱中した雰囲気が長く続いた。

3. 「汝と汝」：伝統的日本的対人関係とDMT

上の二つの場面は、様々な条件が異なっており、厳密な比較をすることはできない。しかし、Octaband® をほぼ同じ方法で使用しており、グループ参加者の年齢層や健康状態には類似性があることから、二つの場面で観察された相違点を挙げておくことには意味があると思われる。

アメリカでの場面では、風船が強い動きを誘発するという効果が目立っていた。参加者はOctaband® を介したつながりを保ちながらも、風船との個々の関係に集中しやすく、風船は「私のもの」として存在しているように感じられた。一方、日本での場面では、自然と全体が同調した動きが生じた。風船に対する動きも柔らかく、「みんなのもの」としての風船を維持しようとする暗黙の共通理解があった。前面に出るのは一体感であり、その中に参加者の個性やおかしみが垣間見えるようであった。

ダンスセラピーに限らず、心理療法の理論と技法はほとんどが欧米由来である。しばしば指摘されることであるが、その日本での実践を考える時に、このような日本文化の特徴をどのように理解し、理論や技法を活用するためにどのような工夫をしたらいいのかということを探索するのは、不可欠な作業である。

そのヒントになると思われるのが、哲学者・森有正の「汝と汝」というキーワードである。森有正は、1950年からパリに留学し、そのまま移住した哲学者である。異国の地に生きる日本人として厳しく自分を見つめ抜いた、まさにその「経験」から、独自の「経験の哲学」を創っていった。彼は「自分の経験だけが真に自分であり、それ以外には何もない」と述べている。鑑（1990）が紹介しているように、森は経験ということをして、「自分の肉体を通して、感覚のことば、『肉体のことば』で語られねばならない性質のもの」としてとらえており、この点がDMTにおける身体的体験の理解に有用であると筆者は考える。

森の思索では、日本人においては「経験」の内容が「自己」の単位にまで分割されない、つまり、ゆるぎない自分だけのものになっておらず、常に二者関係の中にある、「二人称の世界」であるという。そして「汝」に対立するのは「我」ではなく、「対立するものもまた相手にとつての『汝』なのだ」（傍点著者）と述べ、「凡ては『我と汝』ではなく、『汝と汝』の関係の中に推移する」と指摘している。すでに50年近くも前の指摘であるが、少なくともダンスやムーブメントに現れる日本人の心性としては、今も変わっていないのではないだろうか。自由に動いていいと言われても、他の人からどう見られるかを気にしてしまう私たちは、「わたし」を生きる以上に「あなたにとってのあなた」を生きていると言える。

一方で、一人ひとりのからだと分離されないものであるはずの「経験」が、二人称の世界、二項関係を基盤としているということは、自他の区別の薄さの中で、身体的感覚のレベルで誰かと何かを共有しやすいということでもあるだろう。日本文化が察しの文化であると言われたり、集団の一体感が強調されたりすることも、この点につながると思われる。そのような二人称の世界に存在の基盤があるということ、強みとして生かすには、どう

すればよいだろうか。そしてその上で、一人称の世界を、孤独に耐えて自己を確立するということを目指すには、どうすればよいだろうか。この問いは、壮大な文化論を語るためでは全くなく、日本での地道なDMT実践のために、避けられない問いであると考ええる。

4. あたまとからだの断絶：現代日本とDMT

もう一点、森の思索のなかで、検討すべき点を挙げる。それは、近代日本における、観念と経験との断絶である。森は、「観念と経験との不断に吟味され続けること、いいかえれば観念がおのずから批判の原理を内包していることが、ヨーロッパ文明の基本的性格」と論じた。これは、人間のからだを通った経験がまず先にあり、そこから知的な観念と、それを共有することばの世界が生みだされ、それが常にからだの世界から切り離されずに、行ったり来たりしながら存在するということである。ところが日本は、その観念を、経験と断絶した、言葉だけの形で受け入れようとした、そのことが第二次世界大戦での敗戦や社会的思想的混迷につながったとしている。つまり、日本の「汝と汝」的社会が、まったく原理の異なるヨーロッパの「我と汝」的文明を輸入しようとしたとき、日本人のからだに蓄積された経験とつなげることができなくなってしまった。それが観念と経験との断絶ということであり、つまり、「あたま」の世界と「からだ」の世界がうまくつながっていないということである。これは現代人に通じる重要な指摘である。

さらに森は「言葉の魔力に自己を失った現代は、この「経験」への不信に満ちている。各人は自己の肉体を確信しているように、自己の経験に対する確信を回復せねばならぬ」と述べているが、この点については、現代の方が状況悪化しているのではないかと思われる。約50年前の日本人の身体感覚をリアルに再現し、再体験することは筆者にはできないが、はたして現代の私たちは、「自己の肉体を確信している」だろうかと自問すれば、きわめて心もとない。観念と経験は断絶したままで、自己の経験どころか、からだも信じられなくなっているのが、私たちが直面している危機であると考えられる。

IV. 今後のDMT実践の課題

1. 観念としてのDMT

DMT＝観念、私たちが感じること＝経験、と考えれば、文化的背景を考慮せずにDMTを学び実践することは、経験と断絶した観念の輸入を繰り返すことにもなりかねない。両者が断絶しないように不断に吟味すること、すなわち、アメリカで生まれたDMTと、その実践の中で日本人である私たちが感じることを響き合わせる作業が必要であり、その要点は以下のように整理できる。(1) 日本人が受け入れやすい形を模索することをベースに、(2) その中でささやかに感じられ、表現される自分らしさを拾っていくこと、そして(3) それらを共有できる言葉を探すこと、である。

(1) 日本人が受け入れやすい形を模索する

たとえば、日本では踊ることに對して「恥ずかしい」という反応が多い。最近はダンス

を楽しむ人が増えているが、話題になるのは、ヒット曲の振付を真似て動画サイトにアップするというような、振付を覚えて上手に踊るといふ楽しみ方が中心である。自己表現よりも「変な動きをしたら恥ずかしい」が上回るあり方は、日本のダンス人口が増えていると言われる今も、ほとんど変わっていないように思われる。

「恥ずかしさ」を受け入れ超えていく端緒として、「型のある動き」を挙げる。たとえば、筆者がDMT実践の一つの軸としているフラダンスは、型のあるダンスである。フラダンスのとっつきやすさ、間口の広さの一因は、シンプルな型があることである。型があることで恥ずかしさは和らぎ、型に守られながら、動くという体験を積み重ねることができる。日本人にとって、型をきちんと真似て踊ることは比較的抵抗感が小さく、皆と同じという一体感を味わいやすい。それはいわば、二者関係の中での自他の分化されない「経験」からスタートするということである。

(2) ささやかに感じられ、表現される自分らしさを拾っていく

DMTとして「型のある動き」を用いる場合、重要なのは、上手く型をなぞることではなく、型の中での自分の動きを感じることであることは言うまでもない。感じられるのはかすかな感覚や感情である場合も多く、やはり「恥ずかしさ」であったり、自分の内側よりも外側のことが気になって感じられる場合もある。それらも否定せず、大切に拾い上げることで、からだを信じる、肉体を確信する、という感覚を、少しずつ自分のものにしていくことができるのではないだろうか。その中で、たとえば「周囲に合わせすぎてしまう自分」に気づくような展開があれば、竹内敏晴のレッスンのような、日本で創始された心身実践技法との近接点を見出していくこともできるだろう。

(3) 共有できる言葉を探す

前述したように、DMTにおいて他者との体験の共有を促すのは言葉である。町田(2012)は、日本のDMT実践では欧米と比較して言語化が少ないことを指摘しているが、それは日本では言語化が不要という意味ではない。ぼつりぼつりとでも語れる時間を、語らない自由も含めて持つことは、やはり必要である。また、恥ずかしさ、内側を感じられないこと、外側が気になることなど、DMTに対する馴染めなさを口にするにも、心理療法的意義を見出すことができる。これらのことが、一体感の世界から抜け出て、「自己」を作ることに繋がっていくと考える。

V. おわりに

個人的な話になるが(と言うなら本稿は個人的な話だらけなのであるが)、IIで示した「湖のイメージ」には続きがある。メアリーが誘ってくれた日本庭園に、一緒に行くことはできなかったが、筆者ひとりで行く機会があった。蓮の花が咲いた小さな池があった。季節は秋で、蓮の花の傍には赤く色づいた落ち葉が浮かんでおり、日本のようで日本でない、パラレルワールドのような風景に感動していると、池の水の中を黒くて細長い不気味なものがスーッと動いているのが見えて、ギョッとした。水蛇だった。感動は吹っ飛び、すっ

かり恐ろしくなって、ひええ、と逃げ出しかけたが、静かな水中を、金魚の群れを脅かしながら泳ぎ回る水蛇にはしぶとい生命力も感じられ、踏みとどまってしばらく（少し遠くから）見ていた。このときに、「湖のイメージ」には水蛇が加えられ、豊かになったと感じられる。そして今後DMT実践において、「水中の蛇」とどう向き合い、付き合い、かわるかが問われているように思われる。

付記

本稿は、第2回就実大学心理教育相談室公開研修会シンポジウムにおける発表を大幅に加筆修正したものです。DMTの学習と実践を通して多くのことを教えてくださった皆さんに感謝いたします。

文献

- Capello,P.P.(2007). Dance as Our Source in Dance/ Movement Therapy Education and Practice. *American Journal of Dance Therapy*, 29, 37-50.
- Capello,P.P.(2012). Cultural Identity and Collaboration in Dance/ Movement Therapy : The 2011 ADTA International Panel. *American Journal of Dance Therapy*, 34, 20-26.
- Capello,P.P.(2015). How Culture Shapes Dance/Movement Therapy Education : Unique Aspects Throughout the World—The 2014 International Panel. *American Journal of Dance Therapy*, 37, 16-25.
- Dance for Connection(2017). <https://danceforconnection.com/octaband/>
- 町田章一 (2012). ダンスセラピーの概要. 大沼幸子・崎山ゆかり・町田章一・松原豊 (編著) *ダンスセラピーの理論と実践—からだと心へのヒーリング・アート*. ジアース教育新社. pp.11-29.
- 松原豊 (2012). 身体と表現. 大沼幸子・崎山ゆかり・町田章一・松原豊 (編著) *ダンスセラピーの理論と実践—からだと心へのヒーリング・アート*. ジアース教育新社. pp.91-105.
- 森有正 (1972). *木々は光を浴びて*. 筑摩書房.
- 鏑幹一郎 (1990). *アイデンティティの心理学*. 講談社.
- 八木ありさ (2008). *ダンス・セラピーの理論と方法—舞踊心理療法へむけての序説*. 彩流社.
- 山田美穂 (2017). テキサスだより (第一報) —昨日に架ける橋, 橋の下の泥, 泥中のタケノコ. *就実大学心理教育相談室年報*, 創刊号, 9-18.